

本科 1 期 6 月度

解答

Z会東大進学教室

高2東大日本史



8章 鎌倉幕府の成立

問題

【1】

解答

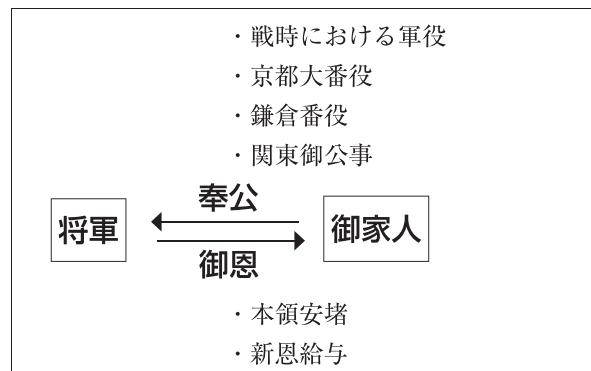
- 問1 1. 1190 2. 公文所 3. 後白河法皇 4. 征夷大将軍 5. 鎌倉殿
6. 新恩給与 7. 鎌倉番役 8. 公領（国衙領） 9. 荘園領主 10. 関東御領
問2 右近衛大將 3. 本領安堵 4. 大番催促 5. 本所 6. 9カ国

解説

前半部分は源頼朝に関して、後半は鎌倉時代の武士の主従関係などについて述べられている。頼朝については、大まかに彼の動向を押さえておこう。

1180	源頼朝、挙兵。侍所設置
1184	公文所・間注所設置 源義仲を倒す
1185	平氏滅亡 頼朝、守護・地頭設置の勅許を得る
1189	頼朝、奥州を平定
1190	頼朝、上洛。右近衛大將に任命される
1192	後白河法皇没。頼朝、征夷大將軍に任命される ⇒名実ともに鎌倉幕府が成立

主従関係については、鎌倉殿と御家人との御恩と奉公の関係を押さえよう。



【2】

解答

1. ハ 2. 口 3. 口 4. ハ 5. d 6. a 7. a 8. c
9. b

解説

Aは『御成敗式目（貞永式目）』制定の趣旨について、北条泰時が1232（貞永元）年に記した書状である。Bは『御成敗式目（貞永式目）』にある、女性が所領を養子に相続することを認めた条目である。双方とも有名な史料なので、よく読んでおこう。

問1

「御成敗」とは、裁くことである。史料が有名なので知っておくのが一番だが、この式目が『御成敗式目』といわれることからも想起できる。

問2・問6・問8・問9

『御成敗式目（貞永式目）』は源頼朝以来の先例と武家社会の慣習（道理）を基準として作成された。これは入試頻出事項なので確実に押さえておこう。また、全51条というのもよく問われる所以覚えておこう。

制定者は北条泰時。泰時は、執権の補佐役である連署（初代北条時房）、有力御家人から構成される政務・評議・裁定機関の評定衆を設置した。裁判機関の引付衆は北条時頼が設置した。

問3・問4・問7

解説1～2行目参照。

問5

「法の見解によれば許されないことだが」と述べられているので、当時「法」として効力を持っていたものは何かを考えれば、正解はdの律令となる。

9章 鎌倉幕府の滅亡

問題

【1】

解答

- a チンギス=ハーン b フビライ c 大都 d 高麗 e 北条時宗
f 南宋 g 得宗 h 御内人 i 霜月騒動 j 北条貞時

解説

a 1206（建永元）年、チンギス=ハーン（成吉思汗）の指揮の下に、モンゴル系・トルコ系の諸民族が統一され、モンゴル帝国（中国風の呼称では蒙古）が形成された。チンギス=ハーンは、内陸の貿易路を進み、西のトルコに近い地域や、イラン・北西インドに侵入した。

チンギス=ハーンの後継者となった、息子のオゴタイは、中国の地域にあたる金を1234（文暦元）年に滅ぼし、首都をカラコルムに定めた。この代の時にモンゴル帝国は東ヨーロッパのポーランド・ハンガリーにも進出している。

しかし、チンギス=ハーンが息子たちに土地を分割し、オゴタイ=ハン国、チャガタイ=ハン国などに分かれたことから、モンゴル帝国は分裂する。1260（文応元）年に、チンギス=ハーンの孫であるフビライが宗家を継いだ頃、モンゴル帝国は事実上分裂した。

b・c フビライは、中国の豊富な農業資源に着目して、1264（文永元）年に、都をカラコルムから現在の北京の地に遷した（この時の呼称は中都ちゅうとであり、1272（文永9）年に、名を大都に改めている）。1271（文永8）年、フビライは、中国の地域を支配の中心とするため、国号をモンゴル帝国から中国風の元に改めている。

d 元の領土は、高麗を服属させたフビライの時に最大となった。日本をも属国にしようとして朝貢を要求してきたのが、元寇の契機であった。

e 1268（文永5）年、すでに元の属国となっていた高麗の使者により蒙古の国書が届けられたが、幕府は蒙古に返書を送らぬことを定め、西国の守護に蒙古襲来に用心するように命じた。そして、北条時宗が8代執権となり、元への対応を指揮した。

翌1269（文永6）年3月、蒙古・高麗の使いが現れ、対馬の島民を奪って帰っている（9月には島民を帰した）。1270（文永7）年、朝廷は元への返牒（返事）を作り幕府に送っているが、幕府はこれを押さえて送らず、臨戦体制を整えた。幕府の海防体制が整ったあと、1274（文永11）年、元・高麗軍が襲来する。まず壱岐に来航し、文永の役の開始となった。

f フビライは、1279（弘安2）年に南宋を滅ぼした。これで中国全土を支配したことになり、その後に日本に再度の使者を送っている。

g 元寇の頃から、得宗の権力が増し、得宗専制体制へと向かう。執権よりも、北条氏の家督を継ぐ、得宗が優位となった。

h 御内人は、得宗家の家自体に仕える者であったが、得宗が実権を握るにしたがい、幕政をも左右するようになった。

- i しもつき 霜月騒動は、1285（弘安8）年に起こった。鎌倉時代の後期において元寇とならぶ重要事項である。内管領の平頼綱が古くからの御家人安達泰盛一族を滅ぼした。
- j 北条貞時の執権就任は、1284（弘安7）年である。その翌年に起こった霜月騒動が、得宗専制政治確立の契機となった。

【2】

解答

- (ア) (2) (イ) (1) (ウ) (3) (エ) (2) (オ) (3)
(1) 持明院統 (2) 大覚寺統 (3) 両統迭立 (4) 記録所 (5) 得宗

解説

南北朝の内乱は持明院統と大覚寺統の両統迭立が軸になる。よってこの時代を押さえる際に、両朝の特徴をしっかりと確認しよう。

- (ア)・(イ)・(1)・(2)

両朝の特徴…持明院統：後深草天皇～ 長講堂領

大覚寺統：亀山天皇～ 八条（女）院領

- (ウ)・(エ)・(オ)・(4)・(5)

後醍醐天皇の討幕の動向について。

〔正中の変〕

近臣の日野資朝・日野俊基らによって密かに討幕計画が進められた。六波羅探題を襲撃することを計画したが、計画が事前に洩れて失敗。資朝・俊基は捕らえられ、資朝は佐渡に流された。後醍醐天皇は無関係として追及されなかった。

〔元弘の変〕

後醍醐天皇は再び挙兵を企てたが、側近の吉田定房が幕府に密告して失敗した。天皇は京都を脱出し、笠置山へ逃れ、河内の豪族楠木正成が天皇方として赤坂城で挙兵し、幕府軍を迎撃ったが敗北、赤坂城は陥落した。後醍醐天皇は捕らえられ、1332（元弘2）年、隠岐へ流される。日野資朝・俊基は処刑された。鎌倉幕府は後醍醐天皇に代えて持明院統の光嚴天皇を即位させる。

〔鎌倉幕府の滅亡〕

河内では赤坂城陥落時に行方不明になった楠木正成が千早城で挙兵し、また、吉野では護良親王が討幕勢力の中心となる。このような状況の下で後醍醐天皇は隠岐を脱出し、伯耆の豪族の名和長年に迎えられ、伯耆の船上山で挙兵。各地の反幕府の土豪武士らもこれに呼応した。対する幕府は鎮圧のため有力御家人足利高氏を大将とする軍勢を送るが、高氏は幕府に反旗を翻し六波羅探題を攻略、関東では新田義貞が鎌倉を攻略し、鎌倉幕府は滅亡した。

10章 南北朝の動乱と室町幕府の成立

問題

【1】

解答

1 シ 2 ク 3 ヒ 4 エ 5 ヌ 6 チ 7 ヘ 8 イ
9 ト 10 サ

解説

- 1 1331（元弘元）年、後醍醐天皇は討幕計画を立てたが近臣の密告により失敗し、天皇は捕らえられて隱岐に流された。しかし、この事件を機に悪党や有力御家人の挙兵が相次ぎ、1333（元弘3）年に鎌倉幕府は滅亡し、後醍醐天皇を中心とする公家政権が誕生した。
- 2 1335（建武2）年に、鎌倉幕府の再興をはかつて北条時行が起こした乱を中先代の乱という。時行は鎌倉を占拠したが、足利尊氏に鎮圧された。
- 3・4 中先代の乱をきっかけに関東に下った尊氏は鎌倉を奪回し、新政府に反抗する立場を示した。後醍醐天皇は新田義貞を派遣して尊氏討伐を試みるも、義貞は破れ、尊氏は1336（建武3）年には京都を制圧し、持明院統の光明天皇を立てて建武式目を発表した。
- 5・6・7 室町幕府では、尊氏の弟の足利直義と尊氏の執事高師直が対立しており、1350（正平5・觀応元）年に觀応の擾乱と呼ばれる武力抗争に発展した。
- 8 尊氏は、1352（正平7・文和元）年に、戦乱の激しかった近江・美濃・尾張の3国に対して半済令を発布した。
- 9 鎌倉後期以降、分割相続に代わって単独相続が行われるようになり、惣領制は崩壊し、武士は血縁ではなく地縁を重んじて結びつくようになった。
- 10 地方に土着した武士は国人と呼ばれた。

【2】

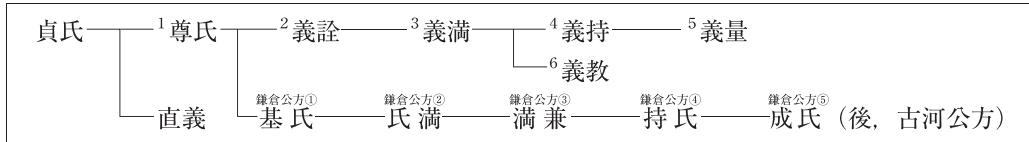
解答

- 問1 イ 足利尊氏 口 足利基氏 ハ 足利持氏 ニ 上杉氏憲（禅秀）
ホ 足利義持 ヘ 足利義量 ト 足利義教
- 問2 上杉憲実 足利学校 問3 関東管領 問4 1416年 問5 永享の乱
問6 嘉吉の乱 赤松満祐 問7 陸奥・出羽

解説

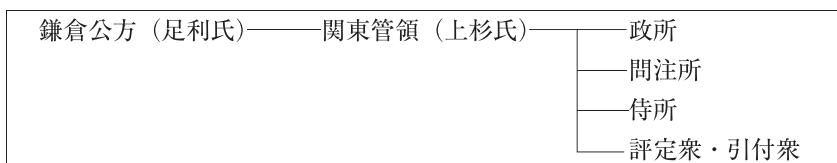
室町時代の政治史を押さえる際には、將軍と鎌倉公方との対立の構図もあわせて確認しておきたい。まずは將軍家と鎌倉公方を系図で押さえよう。

[足利氏系図]



また、鎌倉府は幕府と似た機構であった。もともとは関東8カ国と伊豆・甲斐を統轄していたが、足利氏満の時に、陸奥・出羽が加わった。

[鎌倉府の機構]



將軍家と鎌倉公方家は、関東管領の上杉氏を巻き込みしばしば対立したが、それも押されておこう。

[上杉禪秀の乱]

1416（応永 23）年、前関東管領上杉氏憲（禪秀）が鎌倉公方足利持氏に不満を持ち反乱を起こした事件。幕府は持氏を支持し、翌年、氏憲は敗北した。

[永享の乱]

1438（永享 10）年、持氏と足利義教との対立回避に努めてきた関東管領上杉憲実が、持氏から疎まれて鎌倉を脱した。持氏は憲実の追討を決定して出陣したが、憲実が幕府の支援を受けたため、幕府軍と上杉軍に鎌倉を攻められた。持氏は鎌倉永安寺に幽閉され、翌年、自害した。

[結城合戦]

1440（永享 12）年、関東管領上杉憲実の支配に不満を抱く結城氏朝らが、前鎌倉公方足利持氏の遺児、安王丸やすおうまると春王丸はるおうまるを擁して挙兵した。しかし、翌年に幕府の支援を受けた上杉軍によって鎮圧され、氏朝は自殺し、2人の遺児は殺された。

J2J
高2東大日本史



会員番号	
------	--

氏名	
----	--